

『スコッツ・マガジン』のアダム・スミス

——『道徳感情論』の出版まで——

渡 辺 邦 博

- I. はじめに
- II. 『スコッツ・マガジン』とアダム・スミス
- III. 小括

I. はじめに

1990年はアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) が没して200年であり、わが国でもそれを記念して各種の出版や催しがなされた。他方でその前年の1989年はアダム・スミスの故地であるスコットランドの雑誌『スコッツ・マガジン (*The Scots magazine*)』創刊後250年にあたる年でもあった。⁽¹⁾ 本稿は雑誌『スコッツ・マガジン』におけるアダム・スミス関係記事を検討することを目的としている。海外はもちろんわが国においても、長くかつ厚みのあるスミス研究が積み重ねられているけれども、それらはどちらかといえばスミスの二大著作である『道徳感情論』 (*The theory of moral sentiments*, 1759) と『国富論』 (*An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*, 1776) とを中心とするもので、スミスが世に出てからスコットランドの知識人たちと共に活躍し、生涯を終えるまでの全領域をカバーするものではなかった。ここで『スコッツ・マガジン』の記事を一括して整理することができれば、従来の伝記的研究にながしかを付け加えることができるし、さらにそれを通じて18世紀のスコットランドにおけるスミス評価が知られれば、スミスの普及の一端に光を当て、より広い立場からする学史研究の足掛りになりうる⁽²⁾とも考えられる。もちろんこうした研究は当の『スコッツ・マガジン』のスミス関係記事だけでなく、この雑誌の中の当該記事以外の諸事件・事柄との関係を分析することが必要であるし、この雑誌の財政的背景、執筆陣、それらとスミスとの関係などを探り出すことが不可欠であろう。だが今のところ筆者にその力はない。諸兄のご

(1) それを記念して1989年に出版された書物を参考文献にあげておいた。

(2) 学史研究における雑誌の効用についてはすでに杉原〔1984〕に示唆があるし、同じく〔1980〕の第2部第1章は、『東京経済雑誌』をサンプルとしたその具体化と見ることもできる。*The Scots Magazine* については、関西学院大学図書館、甲南大学所蔵のものを利用した。双方をあわせればこの雑誌の創刊号から19世紀初頭までを全巻閲覧することができる。今回の調査については関西学院大学経済学部の井上琢智教授のご配慮を得た部分も多い。記して感謝したい。

教示を得ることによって今後それを埋めてゆくことにしたい。

II. 『スコッツ・マガジン』とアダム・スミス

以下では『スコッツ・マガジン』の創刊(1739年)から1800年までに限定して、アダム・スミス関係の記事を拾い出すことにする。

D. ステュアートによれば、スミスは1751年グラスゴウ大学論理学教授に選ばれ、翌年道徳哲学教授に移籍したことになっている(D. ステュアート「スミス伝」, 引用はグラスゴウ版全集第3巻のページ数を記す。p. 273)。まずはこの間の事情を探してみたい。

スミスがグラスゴウ大学教授となるきっかけとなったのは、同大学教授ラウドン(Loudon)の死去である。

(1)それについてはこの雑誌の死亡欄に、

「11月<1750年>。グラスゴウにて、グラスゴウ大学の哲学教授ジョン・ラウドン氏。」とある(*The Scots Magazine*, 1750, Oct. p. 503. 以下西暦とページ数のみを記し、雑誌名を省略することにする)。

また次の記事によれば確かにスミスがグラスゴウで学者としてのスタートを切ったこともわかる。

(2)その昇進(Preferments)の欄に、

「逝去されたジョン・ラウドン(John Loudon)氏の後任として、グラスゴウ大学哲学教授(Professor of Philosophy)アダム・スミス氏。」(1752, Jan. p. 54)とある。ただ、グラスゴウ大学で最初に担当したのは論理学と言われることもある(D. ステュアート「スミス伝」, p. 273)が、この記事による限り、スミスは哲学教授として採用されたことになる。もちろんその結果彼が実際に担当したのが論理学であったという可能性もないわけではないのであって、この間の事情については識者のご教示を請いたい。

それに続いて道徳哲学教授に籍を移したことをめぐり2つの記事がある。

まず道徳哲学の先任者トマス・クレイギー(Thomas Craigie)が1751年の末に死亡する。

(3)その死亡欄には、

「<10月>9日。リスボンにて、自らの健康回復のため当地に赴いていた、グラスゴウ大学道徳哲学教授トマス・クレイギー氏。」(1751, Dec. p. 597)とある。

(4)その昇進欄に、

「論理学教授アダム・スミス、逝去されたトマス・クレイギー氏の後任としてグラスゴウ大学道徳哲学教授となる」(1752, Apr. p. 214.)とある。

アダム・スミスはグラスゴウ大学教授としてこの雑誌に登場したのである。

Gentleman's Magazine (1731) に先立たれたとは言え、*Monthly Review* (1749)、*Critical Review* (1756) などよりも先に創刊されたこの月刊総合誌『スコッツ・マガジン』は、創刊後10年を経て各号に月毎の目次、巻末には索引（テーマ別、結婚・出生・死亡については人名別、書籍は分類別に）を付けるようになり雑誌としての形式を整え始めるが、折から盛んになったスコットランド知識人たちの活動の一環として1755年に創刊された『エディンバラ・レビュー (*Edinburgh Review*)』(1755-6) の紹介にかなりのページを割いている⁽³⁾。その中にはスミスの筆になるとされている2つの論文からの抜粋がある。すなわち、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) の『英語辞典』(1755) に対する書評と、この雑誌『エディンバラ・レビュー』の編集者に宛てた書簡である⁽⁴⁾。後者については、すでに内田義彦『経済学の生誕』(1953年) に「スミス＝ルソー問題」という形で解釈があるが、前者を取り上げたものは須藤 [1979] 以外従来の研究史にはあまり見られない。

まずジョンソンの英語辞典に対する書評は、ジョンソンの計画の欠陥を指摘し、「しかし」と「ユーモア」という2つの項目についてスミス自らの項目を対比的に示すという体裁をとっているが、この雑誌はそれをほぼ正確に全文転載している。その掲載が終わった後で雑誌の編集担当者が、短文ながら企画についての自負を表明していることにわれわれは注目すべきかもしれない。

(5) 「サミュエル・ジョンソン著『英語辞典』、

A. M. クナプトン刊行 2巻、フォリオ版4ポンド15シリング

この辞典は非常に広範なものである。英語辞典は、たとえいかに有益でむしろ必要であったとしても、これまで幾度も企てられながら、ほとんど成功を収めなかった。学術上の難しい言葉や用語を説明することが、英語辞典の名をもったこれまでのすべての作品の主たる目的であ

(3) この雑誌は『エディンバラ・レビュー』の紹介にかなり熱心であったことがわかる。まず1755年8月号にの新刊欄に、The *Edinburgh Review*. Containing an account of all the books and pamphlets published in Scotland, and of the books published in England and other countries that are most worthy of notice. To be published every six months. No. 1. From January 1. to July 1. 1755. 1. s. *Hamilton & Balfore*. と半年おきの雑誌であること、1756年3月号にもその第2号が出されたことが記されている。1755年についてこの雑誌は特に数号を割いている。以下にタイトルを記しておこう。The plan of that work. 375. An account of the history of the rebellion, with notes. 377. (in August) Its remarks on the history of the rebellion answered 432. An account of Hutcheson's moral philosophy 434. On the extraordinary rights arising from necessity 437. (in September) An account of Dodsley's collection of poems 484. Reflections on taste and genius 485. (in October) An account of Johnson's English dictionary 539. Some defects in the plan, illustrated by examples 540. (in November) 1756年については、A literary character of several nations in Europe 125. (in March) のみである。1755年11月、1756年3月掲載のものがスミスの筆になるものである。〈数字は雑誌のページ数を示す〉

(4) いずれもグラスゴウ版全集第3巻に所収。また大道 [1948] にその翻訳がある。本稿でもそれを参照したが必ずしもそれに従っていない場合がある。

(5) 内田 [1953] 77-82ページ参照。

ったように思われる。ジョンソン氏は自らの見解をずっと広く広げ、英語の各言葉の持つさまざまなすべての意味を、極めて完全に収集した。この辞典を他の辞典と比較すると、その著者の功績は非常に非凡なものである。近代語の辞典で高く評価されているのは、フランス・アカデミーの辞典とデラ・クルスカ・アカデミーの辞典である。これらの辞典は双方とも多数の学者の団体によって作成されたものであり、その作成において1個人の生涯が成しうるよりも長い時間を要している。それに対してこの英語辞典は1個人の仕事であり、またその仕事の範囲に比べると非常に短い期間に作成されている。言葉の収集は正確なようであり、非常に豊富であることも認めなければならない。これまで英語であると一般に言われていた言葉はほとんどこの辞典の中に見出されるに違いないと思う。しかし、著者が意見を求めたかもしれない人々の判断にあまり頼らないようにしてもらいたかったし、また一般に使われていない言葉に対して、これらの言葉は時には著名な著者に使用されてはいるけれども、著者自身の見解をもっと述べてくれたらと望まざるをえない。

その仕事が極めて有用であると認められ、その仕事の遂行が賞賛に値するような場合、その仕事をさらに有用にするため、何かを付加することは決してそれを非難することとは考えられないように希望したい。ジョンソン氏の辞典の功績は極めて大きいので、若干の欠陥を指摘し、それが既に持っている功績にわれわれの判断で何か付け加えることをしても、決してその価値を減ずるものではない。これらの欠陥は、われわれにしてみれば十分に文法的でないように思われるその計画のうちに主として存在している。ある言葉の持つ異なった意味は実際よく収集されているが、それらの一般的区分に分類されたり、その言葉が主として現す意味にしたがって整序されたりしているわけではない。そこで外見上は同意義に見える言葉を区別するために十分な注意が払われてはいない。われわれが意図していることがらを説明する唯一の方法は、ジョンソン氏から一、二の項目をとり出し、それに同じ項目を対立させ、彼にそうして欲しかったと思う方法で整理することである*。

* [これは378ページの注1でわれわれが言及している項目である。]

[ジョンソン氏]

But 接続詞 [サクソン語 buze buzan.]

1. Except.

An emission of immateriate virtues we are a little doubtful to propound, it is so prodigious: *but* that is so constantly avouched by many. *Bacon.*

Who can it be, ye gods! *but* perjurd Lycon? Who can inspire such storms of rage, *but* Lycon? Where has my sword left one so black, *but* Lycon?

Smith's Phaebra and Hippolitus.

Your poem hath been printed, and we have no objection *but* the obscurity of several passages, by our ignorance in facts and persons. *Swift.*

2. Yet; nevertheless. 時に *yet* を強めるだけのこともある。

Then let him speak, and any that shall stand without, shall hear his voice plainly; *but* yet made extreme sharp and exile, like the voice of puppets: and yet the articulate sounds of the words will not be confounded. *Bacon's nat. hist* No. 155.

Our wants are many, and grievous to be borne, *but* quite of another kind.

Swift.

3. 三段論法の小前提を導く小辞。now.

If there be a liberty and possibility for a man to kill himself to-day, then it is not absolutely necessary that he shall live till to-morrow; *but* there is such a liberty, therefore no such necessity. *Bramhall against Hobbes.*

God will one time or another make a difference between the good and the evil: *but* there is little or no difference made in this world; therefore there must be another world, wherein this difference shall be made. *Watts's logic, introduct.*

4. Only; nothing more than.

If my offence be of mortal kind, That not my service past or present sorrows, can random me into his love again; *But* to know so, must be my benefit.

Shakesp. Othello.

And *but* infirmity, Which waits upon worn times, hath something seiz'd His wish'd ability, he had himself. The lands and waters measur'd

Shak. Winter's Tale.

What nymph so'er his voice *but* hears. Will be my rival though she have *but* ears.

Ben. Johnson.

No, Aurengzebe, you merit all my heart, And I'm too noble *but* to give a part.

Dryden.

Did *but* men consider the true notion of God, he would appear to be full of goodness.

Tillotson.

If we do *but* put virtue and vice in equal circumstances, the advantages of ease and pleasure will be found to be on the side of religion. *Tillotson.*

The mischiefs or harms that come by play, inadvertency, or ignorance, are not at all, or *but* very gently, to be taken notice of. *Lock on education.*

If a reader examines Horace's art of poetry, he will find *but* very few percepts in it, which he may not meet with in Aristotle. *Addison. Spect.*

Prepar'd I stand: he was *but* born to try. The lot of man, to suffer and to die.

Pope's Odys.

5. Than.

The full moon was no sooner up, and shining in all its brightness, *but* he privately opened the gate of all paradise. *Guardian*, No 167.

6. But that; without this consequence that.

Frosts that constrain the ground, Do deldom their usurping power withdraw, *But* raging floods purse their hasty hand. *Dryden*.

7. Otherwise than that

It cannot be *but* nature hath some director, of infinite power, to guide her in all her ways. *Hooker*, b. 1. § 3.

Who shall believe, *But* you misuse the reverence of your place? *Shakesp*.

8. Not otherwise than.

A genius so elevated and unconfined as Mr. Cowley's, was *but* necessary to make Pindar speak English. *Dryden*.

9. By any other means than.

Out of that will I cause those of Cyprus to mutiny: whose qualification shall come into no true taste again, *but* by transplanting of Cassio. *Shakesp. Othello*.

10. If it were not for this; if this were not.

Believe me, I had rather have lost my purse full of cruzadaes. And *but* my noble Moor is true of mind, and made of no such baseness, as jealous creatures are, it were enough to put him to ill-thinking. *Shakesp. Othello*.

I here do give thee that with all my heart, which, *but* thou hast already, with all my heart I would keep from thee. *Shakesp. Othello*

11. However; howbeit

I do not doubt but I have been to blame; *but*, to pursue the end for which I came, unite your subjects first, then let us go, and pour their common rage upon the foe. *Dryden*.

12. It is used after *no doubt*, *no question*, and such words; and signifies the same with *that*. It sometimes is joined with *that*.

They made no account, *but that* the navy should be absolutely master of the seas. *Bacon's war with Spain*.

I fancied to myself a kind of ease in the change of the paroxysm; never suspecting *but that* the humour would have wasted itself. *Dryden*.

There is no question *but* the King of Spain will reform most of the abuses.

Addison on Italy.

13. That. This seems no proper sense in this place.

It is not therefore impossible, *but* I may alter the complexion of my play, to restore myself into the good graces of my fair critics.

Dryden's Aurengzebe, Preface.

14. Otherwise than.

I should sin to think *but* nobody of my grandmother.

Shakesp. Tempest.

15. Even; not longer ago than.

Before *but* now I left; whom, pin'd with pain, Her age and anguish from these rites detain.

Dryden.

It is evident, in the instance I gave *but* now, the consciousness went along.

Locke.

16. A particle by which the meaning of the foregoing sentence is bounded or restrained.

Thus fights Ulysses, thus his same extends, A formidable man, *but* to his friends.

Dryden.

17. An objective particle; yet it may be objected.

But yet, Madam.....

I do not *but* yet; it does allay the good precedence; fie upon *but* yet! *But* yet is as a jaylor, to bring forth some monstrous malefactor. *Shakesp. Ant. and Cleop.*

Must the heart then have been formed, and constituted, before the blood was in being? *But* here again, the substance of the heart itself is most certainly made and nourished by the blood, which is conveyed to it by the coronary arteries.

Bentley.

18. But for; without; had not this been.

Rash man! forbear, *but* for some unbelief, my joy had been as fatal as my grief.

Waller.

Her head was bare, *but* for her native ornament of hair, which in a simple knot was ty'd above.

Dryden's fables.

When the fair boy receiv'd the gift of right, and, *but* for mischief, you had dy'd for spight.

Dryden.

[批評]

But は反対を現す英語の小辞であって、反対の一般的な意味の種々な変化に応じて、時には副詞の役割を演じ、時には前置詞の役割を演じ、時には接続詞の役割を演じ、時には間接詞

の役割を演ずるものである。接続詞としては、4種の異なった役割を演じている。すなわち反意接続詞として、選択接続詞として、伝導接続詞として、他動接続詞としてである。

1. しかしながら、その本来的なもっとも固有な意味では、反意接続詞としてであり、*however* と同義の意味を持っている。そしてラテン語では *sed*、フランス語では *mais* として現わされている。

私はこれを成し遂げなければならなかったが、妨げられた。I should have done this, *but* prevented: I should have done this: I was *however* prevented.

この2つの小辞の区別は主として次の点に存すると思われる。すなわち、*but* は先行のものに反対を現わしている。文章の先頭につねに置かれているのに対して、*however* は反対する文章が始ってからあとでかなり穏やかに挿入されている。さらにまた、*but* が使用されている時には構文はつねに連続しているが、*however* が使用されているときには、構文はつねに中断されなければならないのである。

こうした見地からすれば、*but* の用法は *however* の用法よりも、反対の意味を現わすものとしてはいっそう鋭いものがあるように思われる。たとえば、口論をしている場合、ある人が、私は私の行為を何か、弁護しなかったのだが、しかし彼の態度の不遜なことがそうさせなかった。I should have made some apology for my conduct, *but* was presented by his insolence. と言った方が I should have made apology for my conduct, I was *however* prevented by his insolence. と言った場合よりも、もっと気分を鋭く現わしていると言えよう。

2. また *but* は選択接続詞として用いられる場合があるが、この際は英語の *unless* や *except* とほとんど同義の意味に用いられ、ラテン語の *nisi* フランス語の *sinon* にあたたる。

人民は彼らにある種の課税を減免しなければ承知しなかった。

The people are not to be satisfied, *but* by remitting them some of their taxes:
……………*unless* by remitting them, &c.

……………*except* by remitting them &c.

最初の文章の表現は、人民を平定するには、提案された方法以外の他のいかなる方法も不十分なことを特に現わしている。第二の文章の表現は、この方法が実行されなければならないか、さもなければ人民は暴動を起こすだろうかのいずれかのことがらについて特に現わしている。したがって最初のものよりも二者選択的だと言える。第三の文章の表現は、提案されるすべてのもののうちもっとも効果的なものを選び出している人々の意見を現わしている。*unless* を用いるときには、提案された以外の他のなんらかの方法を考慮していることを現わしてはいない。ところが、*but* や *except* を用いるときには、他になんらかの方法をも考慮していることを現わそうとしている。*But* は提案された以外の他のいかなる方法をも消極的に拒否することを現わしており、*except* は提案された方法の積極的選択を現わしており、*unless* はこの方法も他の方法も現わさなくて、ただこのことが実行されなければならないかあるいは他の

ことがらがるだろうかという二者選択を現わしているだけである。

3. *But* はまた伝導接続詞として用いられることがある。この場合は、ラテン語の *quin* フランス語の *que* とほとんど同義の意味に用いられ、また英語の *than* あるいは *that* にあたる。前者〈*than*〉の場合は、否定詞の *no* あるいは *not* が先に置かれ、後者〈*that*〉の場合は後に置かれる。

満月が昇り始めるやいなや彼が密かに楽園の門を開いた。The full moon was *no* sooner up, *than* he privately opened the gate of paradise:

……………*but* he privately opened, &c.

スペインの国王がその悪政のほとんどを改めるだろうことは疑いえない。It cannot be doubted, *that* the king of Spain will reform, *not* most of the abuses:

……………*but* the king of Spain will reform &c.

あなたがその尊敬されている地位を悪用するなどとは誰が信じようか。Who shall believe, *but* you misuse the reverence of your place:

……………*that* you do not misuse, &c.

自然がなんらかの支配者を持たないなどと言うことはありえない。It cannot be *but* nature hath some director, &c. It cannot be *that* nature has *not* some director.

4. *But* はまたは他動接続詞として用いられることがある。この場合は、ラテン語の *sed* フランス語の *or* と同義語である。

すべての動物は死すべきものである。すべての人間も動物である。All animals are mortal, *but* all men are animals, &c.

5. *But* はまた量を現わす副詞として用いられることがある。この場合は *no more than* の意味であって、ラテン語の *tantum*、英語の *only* とほとんど同義語である。

私はただ3本の植木を見たのに過ぎない。I saw *no more than* three plants: I saw *but* three plants: I saw three plants *only*.

カウリー氏のような非常に高尚かつ奔放な天分は、ただピンダールに英語を話させる必要があるだけだ。A genius so elevated and unconfined as Mr. Cowley's was *no more than* necessary to make Pindar speak English:

……………was *but* necessary, &c.

……………was *only* necessary, &c.

この最初の表現はここではおそらく適当でないようである。なぜなら、この表現は何か曖昧なものがあるからである。すなわち、そのような天分はピンダールに英語を話させることができるだけであると言うことを意味するし、またただこうした目的のみに必要なものであると言うことを意味するからである。このような曖昧さを除くと、この表現は、他のすべての点から見て、もっとも適切である。

仮にも祖母を疑ってはなりません。I should sin to think *but* nobly of my grandmother:
……………*no more than* nobody, &c.

……………*only* nobody, &c.

ユリシーズはただ彼の友達にとってのみ恐れられていた。Ulysses was formidable, *but* to his friends:

……………to his friends *only*.

ただ神の真の理念を考えた人々だけが……。Did *but* men consider the true notion of God: Did men *only* consider, &c.

私がちょうど今立ち去る前に。Before *but* now I left: Before I left now *only*.

6. *But* はまた前置詞としても用いられる。この用法の場合は、*except* と同義であり、ラテン語の *praeter*, フランス語の *hors* にあたる。

彼らは3人だけ除いて全部死んだ。They are all dead *but* three: They are all dead *except* three.

誓いを破ったライコンに非らずして一体それは誰でありえようか、ああ神よ。Who can it be, ye gods, *but* perjur'd Lycon?

……………*except* perjur'd Lycon?

7. *But* はまたそう度々はできないが間接詞として用いられることがある。たとえば、次のような句の場合である。

よき神よ、ああ彼女は何と端麗なことか。Good God, *but* she is handsome!

[ジョンソン氏]

HUMOUR. *n. s.* [フランス語 *humeur*, ラテン語 *humor*]

1. Moisture.

The aqueous *humour* of the eye will not freeze, which is very admirable, seeing it hath the perspicuity and stuidity of common water. *Ray on the creation.*

2. 古代の医師たちによって粘液, 血液, 胆汁, 黒胆汁などと数えあげられていた人体の各種の体液であって, そのうちのいずれかが支配的であることによって, 気質が決定されると考えられていた。

Believe not these suggestions, which proceed. From anguish of the mind, and *humours* black, that mingle with thy fancy. *Milton's Agonistes.*

3. 一般的な気質ないし気分。

As there is no *humour*, to which impudent poverty cannot make itself serviceable; so were there enow of those of desperate ambition, who would build their houses upon others ruin. *Sidney, b. 2.*

There came with her a young lord, led hither with the *humour* of youth, which

ever thinks that good whose goodness he sees not. *Sidney, b. 2.*

King James, as he was a prince of great judgment, so he was a prince of a marvellous pleasant *humour*. As he was going through Lusen by Greenwich, he asked what town it was. They said, Lusen. He asked, a good while after, What town is this we are now in? They said still, it was Lusen. Said the King, I will be King of Lusen.

Bacon's apophthegms.

Examine how your *humour* is inclin'd. And which the ruling passion of your mind.

Roscom.

They who were acquainted with him, knew his *humour* to be such, that he would never constrain himself.

Dryden.

In cases where it is necessary to make examples, it is the *humour* of the multitude to forget the crime, and to remember the punishment.

Addison's freeholder.

Good *humour* only teaches charms to last, still makes new conquests, and maintains the past.

Pope.

4. 現在の性質。

It is the curse of kings to be attended By slaves, that take their *humours* for a warrant. To break into the blood-house of life.

Shakesp. King John.

Another thought her nobler *humour* fed.

Fairfaix. b, 2.

Their *humours* are not to be won, But when they are impos'd upon

Hudibras, p.iii.

Tempt not his heavy hand; But one submissive word which you let fall, Will make him in good *humour* with us all.

Dryden.

5. グロテスクな形容, 滑稽, 陽気。

6. 病的な気質。

He was a man frank and generous; when well, denied himself nothing that he had a mind to eat or drink, which gave him a body full of *humours*, and made his fits of the gout frequent and violent.

Temple.

7. 短気, 怒りっぽいこと。

Is my friend all perfection, all virtue and discretion? Has he not *humours* to be endured, as well as kindness to be enjoyed?

South's Sermons.

8. 奸策, 策略。

I like not the *humour* of lying: he hath wronged me in some *humours*: I should have borne the humour'd letter to her.

Shakesp. Merry Wives of Windsor.

9. 移り気、気紛れ、性癖。

In private, men are more bold in their own *humours*; and in consort, men are more obnoxious to others *humours*; therefore it is good to take both.

Bacon's essays.

[批評]

Humour はラテン語の *humor* から出たものであって、その本来の意味は体液一般なのである。このような点から、それはこれまで動物の身体の体液や体内を流れる流動体を意味するのにもっぱら用いられていた。

humour は体液一般と次の点で区別されている。すなわち、*humours* は一般に身体の流動体を現わしている。たとえばそこなわれた状態においては、このような人の身体の流動体は *humours* でいっぱいであると言っても間違いではないだろう。

体内の流動体だけが、その自然的健康的状態の場合、*humours* と言われているが、これは眼のなかの流動体を指している。すなわち、私たちは病的なまたは不快であるものとはなんらの関連のない水溶液または水晶液のことを論じているのである。しかしある人が彼の眼に *humours* を持っているとき一般に言うときには、一般に不潔な流動体の意味でそれを理解しているのである。

気分は体内の流動体の状態に左右されるものと考えられているところから、*humours* は気分や性向と同意義とされるようになってきた。

しかし、人間の *humour* は次の点で人間の性向とは異なる。すなわち、*humour* は病的な性向であるように思われること、そして、堅苦しい気分や性向の人は憂鬱な *humours* になりがちであり、繊細な弱気な性向の人は怒りっぽい *humours* になりがちだと言ってもよいのである。

Humour は気持のよいものもあるし、悪いものもある。しかし *humour* は気紛れや移り気なものであるし、またそれに左右されないものである。悪い性質の人が時によい *humour* を持つことがある。これは幸・不幸の一般の道徳的なものとはなんら関係がなく、偶然に彼の上に現われてくると思われるものである。

愉快なことは、すべてのよい *humour* をつくりあげている。このような性質を多く持っている人は a good-humoured man である。しかし、このような人がときに good-humour'd man でない場合もある。それは、good-humour を構成するのに必要なものよりも何か不変な、むらのない、一樣なものと思われる一種の性質なのである。

Humour はまたときに機知 wit に非常に似ている想像力を現わすのに用いられることがある。

機知 Wit は *humour* よりもいっそう意識的な、計画的な、規則だった、そして技巧的なものを現わしている。*humour* はいっそう奔放な、ルーズな、無茶な、そして気紛れなもの

を現わしている。それは発作的に訪れてくるものであり、また彼が支配したり制御したりできないし、また真の丁重さと全く違っているものなのである。humour は機知よりももっと面白いものだと言われているが、機知の人は、紳士が道化者よりも優れているように、humour の人よりもはるかに優れている。とは言うものの、道化者は紳士よりもはるかに面白いこともある。

以上の事例は、私たちが目指す辞典の計画がどのようなものであるかを明らかにするのに役立つだろう。問題になっている事柄が他の人によって異なった見地から眺められていると言うことは、ジョンソン氏の辞典に対する非難を少しも意味しないだろう。ただその場合見出される種々な見解を考察することは少なくとも好奇心の対象になるに過ぎない。英語辞典または英文法を作り上げようとしている人々は、ジョンソン氏のお陰で少なくともその労力の半分は省くことができるのを認めざるを得ないだろう。特殊な言葉や語句に関してなんらかの困難を感じているすべての人々も、これに同じである。この辞典はこうした人々に豊富な事例を提示するだろう。彼らはそれによって判断を決定すればよいのであって、その決定はこれによって容易に行われるのである。この国においては、会話の正しい言葉の基準が全然ないので、この辞典の有用性は直ちに理解されるであろう。もし私たちの推薦がなんらかの程度でこの辞典の精読を促すとすれば、自国語を改善し正確にしようと願うすべての人々に、この辞典を度々利用することを心から勧めざるを得ない。この辞典の功績はそれがいかに利用されるかと言うことで決定されなければならない。それだけがその価値をもっとも正確に決定する基準なのである。たんなる批評は誤ることがあるし、個人的な評価は誤解に基づくことがある。これに対して、この辞典がもし大いに利用されるとするならば、そのときこそこの辞典がまさに一般の人々の賞賛を得たものと言えよう。[177<この雑誌の4月号177-185ページにジョンソン『英語辞典』の序文からの抜粋が掲載されている。——渡辺>]

[わが読者は『エディンバラ・リヴュー』に寄稿している紳士たちの力量を直ちに判断することができる。すでにわれわれは、哲学[424ページ]、表現様式[484ページ]、さらに言語[539ページ]における彼らの学識の実例を示しておいた。そこでわれわれがその著作について示した特徴[379ページ]が充分正当化されることを望むものである。] (1775, Nov. p. 539-44.)

(6) 刊行者への書簡。この箇所では、文学上でのイングランドに対するフランスの優位と、自然科学においてはかつてイングランドはフランスよりも優位を保っていたにもかかわらず、最近では『百科全書』や博物学にその典型を見出すように、明快な記述と適切な配列という点でむしろフランスに遅れをとっていることに執筆者<つまりスミス——渡辺>は注目している。最近スミスの方法との関連でこの点を再認識すべきだという研究が⁽⁶⁾出されている。

(6) 田添 [1992] を参照のこと。

紹介にあたりこのコラムの担当者は、「この著者の提案は、『レビュー』の刊行者は『イングランドについて行うのと同じ構想を広くヨーロッパ全般にめぐらし、そしてその際、遠い将来とまでは言わないまでも、来るべき三十～四十年の間は影響を及ぼすような作品、そして現在私たちのもっている文芸の世界にたとえ暫くであるにしても何かを付加すると思われるような作品を採り上げて吟味すべきである。』 というものである。——われわれは、彼のいう諸国における学問の性格と見なすべき部分を抜粋しよう。——」と述べて、かなり圧縮された形で転載を行っている。

「〈中略以下同様〉学問はヨーロッパのほとんどの国々である程度進歩していますが、外国の国々の注意を引くほどの成功を取めたり評価を得たりしているのは、ただフランスとイングランドにおいてだけです。文芸復興を最初に行った国であるイタリアでもほとんど全く駄目です。またイタリアに続いて近代の天才が最初に輩出した国であるスペインでも火が消えてしまっています。この両国では書物に対する需要がほとんど存在しないので、印刷技術ですらほとんど顧みられていないようです。もちろんイタリアでは最近印刷技術が復興していますがそこで発行されたイタリアの古典の数々の版はただ君主や修道院の図書館だけを意識していますので、一般の人々の要求に応じるものではありません。ところでドイツはまだ本国語を十分改善させていません。そのうえドイツの学者は他国語で考えたり書いたりする習慣がありますから、繊細で微妙な問題を巧妙かつ正確に考えたり書いたりすることがほとんどできないのです。医学や科学や天文学や数学のように明白な判断のみしか必要としない科学には趣味や天分といわれているものを多くは必要としないので、努力と勤勉さえあれば十分なのです。ですからドイツ人はこの方面に成功を取めましたし、将来もまた成功するでしょう。実際ドイツやイタリアにおいて、またロシアにおいてすら、学会の仕事はあらゆる国々で驚異の的となっています。しかし特定の個人の仕事が自国内で問題にされることは稀にしかありません。反対に、フランスやイングランドにおいては特定の個人の仕事が、彼らの学会のどの仕事よりも諸外国の間で問題にされています。

さてもしわれわれが学問や交易や政治や戦争という点で二大競争国であるイングランドとフランスの学問上の功績について、なんらかの一般的な判定を下すとするならば、想像力、天分、発明はイングランド人の才能に、趣味、判断、礼儀その他はフランス人の才能に属するよう思われます。古いイングランドの詩人たち、例えばシェイクスピアやスペンサーやミルトンには、ある種の不均整と行き過ぎの中に、一種の想像力が極めて強く大きくかつ超自然的に現れていますから、彼らの詩を読むものはその天才に驚嘆し眩惑されてしまって、彼らの作品に現れた斑に対するあらゆる批判を取るに足りない意味のないものとして無視してしまいます。ところが優れたフランスの作家においてはこうした天才の閃きは全く見出されません。しかしその代わり正しい配列、正確な礼儀作法とが、情操と言葉遣いの均整がとれよく吟味された優雅

さと結びついています。これは想像力の強烈な瞬間の閃きのように心を打つものではありませんから、何か道理にあわず不自然なもので判断を決して掻き乱したりせず、文体がひどく釣り合っていないことや方法への関心が欠けていることで注意力を消耗させることもなく、むしろ心地よく興味深い関連した対象が正確に連続していることによって、心が楽しまされるのです。

さて自然科学については、これは幸いにも最近になってもっとも発達したのですが、そのほとんどの大発見はイタリアやドイツでなされたものではなく、イングランドにおいて行われています。フランスはこの方面では見るべきものをほとんど生み出していません。

その科学がはじめてヨーロッパに復興したとき、奇抜で巧妙・優雅ではあるが誤った体系がそこで広く受け入れられました。フランスでそうだったことは驚くにあたりません。それはデカルト派の哲学についてよく妥当します。というのも現在では、その哲学の原理と結論が単純で精密であり、明晰であるという点で、ニュートン哲学がアリストテレス学派よりも優れていたのと同様に、アリストテレス学派に勝っていることが、広く明らかになっているからです。ある哲学が一見してその対立する体系よりも多くの点で優れており、それが自国民の製作になり、その名声がその国民に新たな栄誉を加えるものと見なされるような場合には、特別の愛情と賞賛をもってフランス人によって評価されます。ところがその哲学への傾倒ぶりは、彼らの間での自然科学の真の発展を阻害し妨害したように思われます。しかし現在彼らはあの実体のない哲学の魔力からかなり一般的に解放されたように見られます。そして私が新しいフランスのエンサイクロペディアのなかに、その国の卓越したすべての作家とは異なる秩序と明晰さと正しい判断力によって説明されているベーコン、ボイル、ニュートンの思想を認めうることは喜ばしいことです。〈イングランドとスコットランドとの〉合邦以来、われわれは自分たちをある程度このような偉大な人々の同国人と見なすことができるようになり、イングランドの哲学の優越性がこのように競争国民によって認められたということを見ると、ブリテン人として私の自尊心がくすぐられます。あらゆる種類の文献を広く収集した二人の筆者のディドロ氏とダランベール氏は、いたるところでイングランドの科学と学問に最大の情熱を示し、ちょうど今触れた著名な哲学者たちだけでなく、自分自身の国においては今はほとんど無名であり、著書もながらくなおざりにされてきた数多くの普通のイングランドの作家たちの発見や観察をその労作に掲載しています。これと同時に、子孫や外国人たちがイングランドの哲学を自分たち自身の著作によってではなく他国人の著作活動によって知りうる可能性が大きいということに思いをめぐらすと、私は遺憾に思います。フランス人に特有の才能はあらゆる問題をその自然的で単純な秩序に整理することであるように思われます。これによって少しも努力せずとも注意がその問題と共にゆけるのです。ところでイングランド人は発明することにもっぱら努力を捧げているようであり、発見したものを整理したり方法づけしたり、それをもっとも単純で自然的な方法で表現したりすることはどちらかといえばつまらない仕事、といって全然役立たない仕事ではないのですが、として軽蔑しているように思われます。英語で書かれた自然

哲学には全然我慢のできない体系があるだけでなく、部分的な問題についても耐えられないものがあります。キールとグレゴリという二人のスコットランド人の力学と天文学に関するラテン語の論文は、多くの点で混乱や浅薄な点はあるにしても、大ブリテン人によってこれまで書かれたものとしては、この方面において最上のものと見なすべきでしょう。スミス博士の工学においては、これまでこの学問において成された偉大な発見は完全に採り入れられ、それとともにその人自身によって多くの重要な訂正と改良が施されています。しかし彼は学識の点では上述の二人のスコットランド人にはるかに勝っているように思われますが、その仕事を秩序づけ配列する点になると、決して完全とはいえないこの二人にさえ劣ることになります。この欠陥はこの種の問題ではもっとも重要なものではなく、彼ら自身もころよく認めているとは思いますが、私がここでこの欠陥を指摘するのは、別に卑しい動機に基づくものではありません。私は彼の知識と能力に対しては最大の敬意を払っていますし、彼の著書は推薦に値する他のあらゆる資格を具えており、彼自身はブラッドレー博士とともに輝かしい先駆者として私たちに記憶さるべき、イングランドに現存する人としてはほとんど唯一の人です。学問の世界はこの二人の努力と工夫によって確かに高められました。しかし彼らが自分たち自身の国でもっと競争者をもち批判を受けたならば、もっとそうであったとあえて言いたいのです。ところが現代のイングランド人は彼らの祖先の発明を凌駕したり、祖先の名声と争ったりすることはおそろく諦めていますので、学問で一流の地位に達することはできず、そうはいっても二流の地位には潔よしとしていませんから、科学研究を全く放棄したように思われます。〈中略〉

フランスにおいては、博物学以上に熱心に研究されている科学はないでしょう。明確な叙述と適切な配列が博物学者の功績の大部分を構成しています。ですからこのような観点からして、この種の研究は特にかの国民の才能に適しているのです。〈中略〉

イングランド人の独創的発明的な才能は自然哲学においてだけでなく、道徳学や形而上学や抽象的科学においても現われています。この論争多き不毛の哲学を祖先がわれわれに残してくれたものを超えて改善すべく近代においてさなれた試みは、すべてイングランドにおいて行われたものです。デカルトの瞑想を除けば、フランスにおいてこうした問題を独自に目指したのは何もありません。というのも、ルギイ氏の哲学はマルブランシュ教父の哲学同様に、デカルトの瞑想を精緻にしたものに過ぎないからです。しかし、ホッブズ氏、ロック氏、マンデヴィル博士、ジャーフツベリ卿、バトラー博士、クラーク博士、ハチスン氏は、こぞってそれぞれ異なった独自の体系によって、少なくともある程度独創的になろうと努め、自分たち以前に世界が整えた考察の貯蔵庫に何かを付け加えようと努力しました。イングランド哲学のこの分野は、現在ではほとんどイングランド人自身によって無視されていますが、最近フランスに移植されています。私はその若干の形跡を百科全書の中にだけでなく、多くの点で独創的なドゥ・プーイリー氏による調和的感情の理論の中に見出します。さらにとりわけ、ジュネーヴのルソー氏による人類の不平等の起源と基礎に関する最近の論説の中に見出すのです。〈中

略>

現代の詩人は一般に過去の詩人に劣っているようですが、イングランドやフランス、さらにイタリアでも、彼らの名声の高い先人たちよりも価値が無いわけではない人々が何人か存在しています。メタスタシオの作品は全ヨーロッパを通じて評価されていますし、フランスがこれまで産み出したあらゆる点においておそらく最大の天才であるヴォルテール氏は、そのほとんどすべての著作において、ただ一つの作品に全力を注いだ過去の最大の著作家たちとほとんど同じ水準に達していると認められています。その人の独創的で創意に豊かな才能は、彼の最近の悲劇「支那の孤児」にもっともよく現われています。[XVIII, 580<『スコッツマガジン』第18巻の580ページを指す。訳者>]中国の徳の残忍性やタタール人の蛮行の解釈が、フランス人が十分繊細で綿密な判断をもっている立派な礼儀作法を十分尊重しながら、フランスに採り入れられているのを見ることは、好ましいことでもあり驚くべきことでもあります。彼はジュネーヴのルソー氏に宛てた手紙の中で、オランダで彼の名で出版された最近の戦争の歴史は、それが印刷された状態においては彼のものであると見なされていることを否定しています。実際その中には大ブリテンがこの戦争に関与する限りにおいては非常に多くの誤りがあります。それはヴォルテール氏の許可なしに出版されていますので、これに関しては彼は責任を負うべきではありません。そしておそらくそれは氏の正式の許可を得て出版される最初の正しい版で訂正されることでしょう。」(1756, Mar. p. 125-27)

(7)スミスの処女作『道徳感情論』は友人デイヴィッド・ヒュームに好評をもって受け入れられた(ヒューム→スミス, 1759年4月12日付けの手紙 D.ステュアート「スミス伝」, p. 297)けれども、この書物についてのこの雑誌の取り扱い単なる新刊予告にとどまっており紹介の労を取ることにはなっていない。

『道徳感情論』。グラスゴウ大学道徳哲学教授アダム・スミス著。6 シリング。ロンドンのミラーならびにエディンバラのキンケイドとベル発行。」(1759, May, p. 277.)

III. 小 括

以上でわれわれは、1759年までの雑誌『スコッツ・マガジン』におけるアダム・スミス関係記事を検索してきたわけであるが、いわゆるエディンバラ講義、大学行政担当者としてのスミス⁽⁷⁾などについての記事を欠くとはいえ、通常スミス伝で知られている事柄のほとんどがこの雑

(7) ただし、スミスの名前に直接言及しているわけではないが、スミスが積極的に関わったとされる Philosophical Society (1783年に Royal Society of Edinburgh に発展) <1754, p. 184>, Literary Society of Glasgow <1762, p. 517>, Select Society of Edinburgh <1755, p. 125, 127, 129, 308, 407, 1757, p. 163, 1764, p. 229>などの各種の協会 <Royal Society of Edinburgh

誌に盛り込まれている。この『スコッツ・マガジン』を見る限り、アダム・スミスはすでに認知された存在であったのである。次に稿を改めてその後のスミスを検討することにした。

参 考 文 献

- 大道安次郎〔1948〕『経済学古典選書1 国富論の草稿その他』, 創元社。
- 川原和子〔1991〕「スコットランド啓蒙期の主要学・協会, クラブについて——付・関連刊本およびMSS. リスト——」経済資料研究 No. 24, 経済資料協議会。
- E. C. Mossner., & I. S. Ross. [1977], *The Correspondence of Adam Smith*, Oxford.
- The Scots Magazine, 1739–1989–The World's Oldest Popular Periodical A celebration of 250 years*, London, 1989.
- Stewart, Dugald., *Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL. D.* in the Glasgow Edition of *the Works and Correspondence of Adam Smith*, Vol. 3, 1980. (デューゴールド・ステュアート (福鎌忠恕訳) 『アダム・スミスの生涯と著作』, 御茶の水書房, 1984年。)
- 須藤壬章〔1979〕「アダム・スミスの言語論の研究(1)——サミュエル・ジョンソンの『英語辞典』の書評——」日吉論文集23。
- 杉原四郎〔1984〕「思想史研究と雑誌」一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series* No. 7, March.
- 杉原四郎〔1980〕『日本経済思想史論集』, 未来社。
- 田添京二〔1992〕「アダム・スミスの方法をめぐって」経済系 (関東学院大学) 第170集。
- 内田義彦〔1953〕『経済学の生誕』, 未来社。
- Wightman, W. P. D., Bryce, J. C., and I. D. Ross [1980], *Adam Smith Essays on Philosophical Subjects*, Oxford.
- [本稿は, 奈良産業大学経済学会1990年度特別研究助成金にもとづく研究の一部である。]

については1783, p. 445にスミスの名前あり>に関係する記事が多数存在する。しかし, Oyster Club やグラウスゴウの Political Economy Club, Literary Club についての記事はない。最近川原〔1991〕が出され, 大変参考になった。この分野では今後まだこうした基礎的研究の継続が必要であろう。